『潤色栄花娘』と観音信仰

福岡依鈴

はじめに

本稿で取り挙げる漁柳『潤色栄花娘』（明和七年〈一七七〇〉成か。以下『栄花娘』と略す）[1]は、近世期に流行した豆男物というジャンルに属する。佐伯孝弘氏の「豆男物の浮世草子」では、豆男物について次のように定義されている。

主人公が神や仙人から授かった、異様に小さい身体となる（その他、姿を周囲から見えなくする、男が女の姿になる、他人と魂を入れ替えるなど）ことができる特殊能力によって、自己の願望を満たしたり他人の内実を覗いたりする筋の小説。[2]

佐伯氏の指摘している特殊能力の中でも、特に江嶋其磧『魂胆色遊懐男』（正徳元年頃〈一七一一〉刊か）に描かれた、身体の微小性や魂の入れ替えという趣向は人気を博し、同様の趣向を用いた作品が数多く刊行された。『栄花娘』の主人公お豆はこの二つの能力を持っている。この二つの特殊能力をお豆が用いていることを考えると、『栄花娘』は、豆男物の中でも『魂胆色遊懐男』の系譜に連なる作品であるといえるだろう。

『魂胆色遊懐男』から趣向を得た作品には、他にどのようなものがあるのだろうか。以下、『栄花娘』以前に刊行された、序文や作品内容から『魂胆色遊懐男』の影響が認められる作品を挙げる。

- 江嶋其磧か『豆右衛門後日女男色遊』（正徳四年〈一七一四〉刊か）
- 作者不詳『栄花遊二代男』（宝暦五年〈一七五五〉刊）
- 御客散人『吾妻男仙傳枕』（明和三年〈一七六六〉序）
- 雁金その字『色道修行男』（明和五年〈一七六八〉序）
- 穎斎主人『当世穴さがし』（明和六年〈一七六九〉刊）

『栄花娘』以前に五作品刊行されているが、これらの作品の主人公は、多くの作品の題名に「男」が付されている通り、全て男性である。これに対し、『栄花娘』は、豆女となったお豆が活躍する、

女性が主人公の作品である。『魂胆色遊懐男』の系譜の中では、『栄花娘』は女性を主人公とした最初の作品である。

この『栄花娘』について、先行論を一瞥する。尾崎久弥氏は、

此の豆女は、豆男を全く女性に変へ、筋を新しく思ひつかせたもので、換魂は、女が女の体に施すのである。つまり、はかなき女性の空想満足を主題にしたもの、但し豆男物の筋を知れる世間読者に、比較の興味を湧かしめ、又然らざるも、一種の空想好色小説として売らんとしたものである。[3]

と述べる。次に、花咲一男氏は、

内容は序文に「過し比の名作豆男の二巻」（魂胆色遊懐男・女男色遊の二書）「つゞいて二代男のおかしき巻〳〵」（栄花遊二代男）これらの豆男ものにくらべて、豆女ものが有つて然るべきだとの思案から創作されたものであるが、所詮は作者も断わつている通り「色揚げもの」（染め直しもの）であつて、さしたる創意は見られない。[4]

と言及する。尾崎氏が先行する豆男物との比較という点で一定の評価を与えているのに対し、花咲氏は作品内容に独自性が無いことに否定的な態度を示している。

しかし両氏の論は、先行作品との比較をごく大まかに行っただけで、消極的あるいは否定的な評価を与えたものであり、『栄花娘』各章ごとの分析や、先行作品との具体的な比較検証を行っていないという問題点がある。その後、本作品に関して、主人公を女性に変えたという点以外の特徴について言及がなされてこなかったのは、これら先行論の消極的・否定的な評価が鵜呑みにされてきたためである。作品内容をより具体的に分析すれば、性別を変更したことによって追加された要素を明らかにすることができるのではなかろうか。そこにはおそらく、作中で描かれる清水寺の観音への信仰が大きな影響を与えていると考えられる。

以上の点を踏まえて、本稿では、まず『栄花娘』と先行作品を詳しく比較して相違点を検討し、その上で清水寺の観音信仰との関連づけを行って、『栄花娘』の独自性を明らかにしたい。

なお、『栄花娘』の後続作品として、同作者による『潤色栄花娘道中之巻』（明和八年以降〈一六七一〉成か）、他者による続編『潤色栄花二代娘』（安永三年〈一七七五〉序）がある。しかし、両作品には清水寺の観音信仰の要素が見られないため、本稿の考察対象とはしていない。

一　先行作品と酷似する設定を持つ箇所の比較

『栄花娘』には、先行作品と酷似した設定を持つ箇所が幾つか存在する。その中でも、明確に他の作品の設定を流用したと分かる章は、巻五第二「色の水上末絶しなき相生の友白髪」である。この章は『豆右衛門後日女男色遊』（以下『女男色遊』）巻五第四「願ひの

叶ふ世に相生の友白髪」と作品内容が酷似している。章題に「相生の友白髪」という共通した表現が使用されていることも踏まえ、『栄花娘』が『女男色遊』から趣向を流用したことは明確である。どちらの作品でも、主人公の豆右衛門（『女男色遊』）とお豆（『栄花娘』）が色恋の悩みを持った女性と出会い、その悩みを解決することで女性やその夫から褒美をもらい、一生を栄花に暮らすという共通の展開をたどる。以下、類似した記述のある箇所を挙げる。

○『女男色遊』巻五第四「願ひの叶ふ世に相生の友白髪」[5]

成ほどわらはゝ、浮世において何にひとつ不足なき身なれども、しらるゝごとく殿子をもちてより廿年このかた、〈中略〉一度にても夫婦だかれてねると其夜に其まゝたまるゆへ、夫婦の道にはゆめ〳〵あかねど、此子ゆへの病に難義して、姿もかへ尼ともならば、衣にめんじてさいあいの道をおもいとまる事もあるべきやと、〈後略〉

●『栄花娘』巻五第二「色の水上末絶しなき相生の友白髪」

身の上はかくゑよふ栄花にくらして何の思ひはなけれ共、人間の楽第一といふは、夫婦むつまじく妹背のかたらひをなさんより外何か有べき。いかなる事にか、去ル年の頃より殿様一かふにをくへも御入なく、たゞ小性共にのみたわむれ給へば、みづからは幾夜の床もひとり寐に、夏の夜さへ明しかね、鐘にうらみの数をそふのみ。

いずれの女性も、「浮世において何にひとつ不足なき身」（『女男色遊』）、「身の上はかくゑよふ栄花にくらして何の思ひはな」（『栄花娘』）いとあるように、恵まれた境遇にある。ただし、『女男色遊』では妊娠しやすいこと、『栄花娘』では夫である殿様から相手にしてもらえないという悩みも抱えている。

次に、豆右衛門とお豆がそれぞれに提案する解決方法を挙げる。

○『女男色遊』巻五第四「願ひの叶ふ世に相生の友白髪」

扨そのとまらぬといふ術はいかにととはせらるれば、惣じて子のやどると申は、陰陽和合して男の姪水子宮におさまるゆへに子となれり。我玉門の内に入て子宮の口をかため、男の精汁もるゝ時子宮の口に油紙をはつて、一滴も内へ入申さぬやうにふせぎ申事にてあり。しかれば種なくして、何を以てか子生ぜん。〈後略〉

●『栄花娘』巻五第二「色の水上末絶しなき相生の友白髪」

もし我を召し給はゞ、殿様と御床入前に御前様の御まへに飛込、内にて殿様の御道具をもてなさば、むりやうのあぢ出て中々殿様外へ御心はうつるまじ。〈後略〉

両作品で、身体の小さい豆右衛門とお豆が女性器の中に入ることで女性の悩みを解決するという点が共通している。

ここで、二人の女性がそれぞれ抱く悩みを掘り下げて考えてみよう。まず『女男色遊』では、女性が「一度にても夫婦だかれてねる

と其夜に其まゝたまる」と述べるように、性行為をするとすぐに妊娠してしまう体質について悩んでいる。この悩みに対し、豆右衛門は自分の身体の小ささを活かして、精液が子宮に入らないように油紙で遮ることで妊娠を阻止しようとしている。『女男色遊』では妊娠の阻止という点が強調されているといえるだろう。

一方、『栄花娘』はどうか。『栄花娘』では、女性は夫に構ってもらえないことを悩んでいることが分かる。そしてこの女性の悩みに対し、お豆は女性器の中に入り、夫の男性器を「もてなす」ことで夫の快楽を増進させようとしている。当該箇所には妊娠という要素は存在せず、女性が夫の寵愛を求めている描写しか見られない。

両作品を全体として見ても、『女男色遊』には妊娠は色恋の障害となるという意識が見られ、妊娠することや妊娠する女性に対して否定的な描写が多く見受けられる。例えば巻一第四には、屋敷の隠居した後家が妊娠しないように男性が射精を阻止され続ける場面が存在する。その理由については、屋敷に仕える女中が以下のように説明している。

御ゐんきよさま御徒然によつて、今迄角細工のてんかうにて御心をおなぐさみありけれ共、真の物とちがい事たらぬやうにおぼしめして、〈中略〉此度御のぞみのごとくなる男の様子をうかゞひ絵図にあらはし、是にあはせてそなたをめしかゝへられて此役めばかりに御扶持を下さるゝ事なるが、自然男のゐんもれて、いやしき百姓の種を御孕あつて御平産もなされては若殿様をはじめ一家中の外聞かた〳〵よろしからねば、御ゐんきよ様ばかり御こゝろよくば男にはみぢん姪精をもらさせなと〈後略〉（巻一第四「役めは鵜つかひ同前の身喰ぬ殺生」）

もし「いやしき百姓」の男性の子を身分の高い屋敷の後家が妊娠した場合、後家の外聞が悪くなるため、男性の射精は許されないのである。

同様に巻一第一「あがり膳すはつた胞衣の紋違ひ」、巻二第三「生物預り是にこりよ道西坊」、巻三第二「妾を岡崎の腰より下屋敷の楽み」などでも、妊娠を忌避する要素が見られる。妊娠が色恋を妨げるという意識が『女男色遊』の根底にあることは明らかであろう。

このような『女男色遊』の傾向に対し、『栄花娘』では妊娠に対する忌避は見られない。妊娠が関係する話としては、巻四第二があるが、この話では悪人に騙されて命の危機に陥った女性を、清水寺の観音の使いから御告げを受けたお豆が救う展開となっている。

男はにが〳〵しい顔で、なんじや、もふはらんで七月になるか。エ、いま〳〵しい、こんなかたわをはらませて外聞が済ふか、〈中略〉金の五七十もよこすならおれが女房にしやうが、よんだ晩にしめころして仕廻ふぶんだ。〈中略〉お豆思ふは、とかく此おしどのゝ腹には一トさうどうあるべし、其時こそ入かわつて悪人めを閉口させんと、此家をしりぞかず。（巻四第

二「色と欲とを一時にいゝつめられた唖の一声」）

この箇所では、妊娠したことよりも、障がいを持つ女性を騙して殺そうとする悪人を批判しており、『女男色遊』に見るような、妊娠に対する単純な忌避とは異なるといえるだろう。

以上の通り、『女男色遊』と『栄花娘』は物語の展開や要素は類似している。しかし、『女男色遊』に存在した妊娠に対する忌避という要素が『栄花娘』では完全に排除されているという相違があることには着目すべきであろう。

二　お豆の設定―清水寺の観音の申し子として―

妊娠に対する忌避の要素が『栄花娘』では排除されているのはなぜであろうか。以下、この物語の中心となるお豆の設定の分析を通して、要素が排除された理由を明らかにしていく。

巻一第一冒頭で、お豆の出生の経緯が次のように述べられる。

むかしの草双紙にも申子とやらとて、神仏に願立すれば、ない子もさづけ給ふとのこと、日頃信心故、月参せし清水の観音さまへ御たのみ申たら、よもや御利生のないはづ有まじと、それより御ゑん日より七日が間、毎日〳〵参詣し一心不乱にいのりしに、〈後略〉（巻一第一「色娘の行末は箔の付た豆女」）

お豆は、子を願う両親が清水寺の観音に願うことで生まれた申し子であるとされている。申し子という設定については、この箇所以外でも、清水寺の観音の使いである虱やお豆本人によって言及されている。

まず、巻一第一で伯母に軟禁されたお豆に対し虱が御告げをする場面において、お豆に能力を与えることになった経緯を次の通り述べている。

扨われ〳〵打寄相談するに、汝が前生にまかぬたねゆへ、思ふやうにはなりがたし。しかれ共余り一心不乱なるねがひと云、殊に其方はこちらへ申子なれば別而如在なりがたく、清水でも殊のほか御苦労になされ〈後略〉（巻一第一「色娘の行末は箔の付た豆女」）

次に、巻五第二では、夫との色恋に悩む女性の前にお豆が現れ、次のように身の上を語っている。

しばらく〳〵、まつたくおどろき給ふ者にあらず、われは好色の大願によつて、かく身を変ぜし女にて、清水のくわんおん、まつたけし母神の申子なり〈中略〉好色一道のことは神仏にもゆるしを蒙りし女なれば、少も御気遣有まじ。（巻五第二「色の水上末絶しなき相生の友白髪」）

「殊に其方はこちらへ申子なれば別而如在なりがたく」、「清水のくわんおん、まつたけし母神の申子なり」とあるように、どちらも申し子という表現が使用されている。

申し子という設定は、先に述べた『女男色遊』の豆右衛門や、他

の先行作品の主人公には見られない、『栄花娘』独自のものである。この清水寺の観音の申し子という点から前述の相違を考えると、清水寺の観音や清水寺という場の意識の影響が指摘できる。

まず、『栄花娘』以前にも、『梵天国』や『千手女の草子』などの御伽草子では、清水寺の観音の申し子が登場する。本節の最初に掲げた『栄花娘』巻一第一に「むかしの草双紙にも申子とやらとて、神仏に願立すれば、ない子もさづけ給ふ」という言葉があったが、この「むかしの草双紙」は、申し子譚が描かれている御伽草子のことを指しているのではないか。ただし、『鉢かづき』や『さよひめ』では長谷寺の観音、『一寸法師』では住吉明神に祈ることで子どもが生まれるというように、御伽草子では様々な神仏の申し子が登場しているため、特定の神仏がとりわけ子を願われているわけではない点には留意する必要がある。

次に、近世当時の清水寺では子を願う信仰が存在した可能性について検討を行う。近世の清水寺では、本尊の千手観音以外にも、境内にある子安塔が信仰を集めていたことが、近世に出版された京都の地誌や清水寺の略縁起などの記述から読み取ることができる。

まず、中川喜雲『京童』（明暦四年〈一六五八〉）では、子安塔について以下のように述べている。

そも〳〵こやすの塔は、たむら丸の御娘くわいにんの時、御平産のいのりにこんりうありし也。御本尊はくわんをんぼさつなり。〈中略〉まことにこやすのくわんをんときけば、一しほ有がたし。人にはえかたらぬわが心のうちにたのみたてまつる事有ければ、ねんごろにぬかづきたてまつる折から、いづこの人なるらん、つもる年十九かはたちかとおもはるゝうるはしきよそほひしたる女性の、顔ふかくかくしていくたびとなくくりかへし〳〵おがみ、下女をめしてわに口の緒などまいらせらるゝは、まことに心のうちおしはかり、われとおなじねがひ事なるべしとおもはるゝに、〈後略〉[6]

「人にはえかたらぬわが心のうちにたのみたてまつる事」は、本文中の記述から、妊娠・出産に関わる願い事であったことが推測される。また、「つもる年十九かはたちかとおもはるゝうるはしきよそほひしたる女性」とあるように、若い女性が子安の塔に参詣していたことが分かる。

また、清水寺が発行していた『洛東　音羽山清水寺略縁起』（元文三年頃〈一七三八〉発行か）では、子安塔についてこのように述べている。

中門《西門と号す是也》の東に、三重の塔婆《子安塔と称す》あり。此塔は、嵯峨天皇御宇に、皇子御誕生の為、御立願の事あり。其験により、葛井親王《田村丸の娘春子女御の所生也》勅をうけ給ひて、御造立ありき。〈後略〉[7]

「皇子御誕生の為、御立願の事あり」とあるように、天皇が皇子

の出産の無事を願い、子安塔を建てさせたということが記されている。建立された経緯からも、この塔が出産や妊娠の願いと関連付けられていることは明らかである。

以上の地誌や略縁起の記述から、近世では、子安塔が子を願う、あるいは安産を願うための場であると認識されていたと考えられる。子安塔に対する信仰が、『栄花娘』で清水寺の観音に子を願うという設定に影響を与えているのではないだろうか。

このように、清水寺の観音や清水寺という場は、妊娠・出産と関連づけられることが多かったことが分かる。清水寺の観音の申し子であるお豆にもこのイメージが適用された可能性は十分に考えられる。『女男色遊』が持っていた、妊娠に対する忌避という要素が排除されたのは、この清水寺の観音や子安塔に対する信仰と矛盾する要素であったからではないだろうか。

三　『栄花娘』と清水寺の観音信仰

ここまで、お豆の申し子設定に着目し、『女男色遊』と『栄花娘』の相違に清水寺の観音や子安塔に対する信仰が影響している可能性を指摘した。しかし、それ以外にも『栄花娘』では重要な場面の多くで清水寺の観音が関わっている。以下、清水寺の観音が関わっている箇所を挙げる。

まず、お豆が色恋の自由を清水寺の観音に願った結果、清水寺の観音の使いである虱が現れ、お豆に能力を授けることを告げる場面である。

〈前略〉七日断食して、父母の念ぜられし清水の観音を無理な願ひにせめはたり、縦身はいかよふに成とても、色遊びの心儘になりまするやうにと五体をなげうつて祈るに、〈中略〉ある夜のことなるに、お豆がねたる枕元より大キなる虱一疋這出、たちまち白髪の翁と変じて曰、汝好色にゑんなき前生をしらず、清水のくわんおんをわが楽しみのかとう人にして無理なるねがひ、人間ならば大に腹を立給ふべけれども、仏の身にては返て不便に思召され、何卒願を叶へつかはさんと有がたき御方便、〈中略〉古いうちから新しい笑ひもがなと了簡付て、汝が豆男を羨むにまかせ、近頃かびくさけれども、汝がすがたを変じて豆女になすべし。（巻一第一「色娘の行末は箔の付た豆女」）

夢の中で直接清水寺の観音が現れることはないが、その使いである虱が述べている通り、特殊能力を清水寺の観音が授けている。また、本文中の記述から、一般的には疎まれる好色な願いに対して、清水寺の観音は咎めることなく救済しようとする意識を有することが窺える。

次に、虱から御告げが伝えられる場面を取り挙げる。『栄花娘』において、虱は二度お豆に対して御告げを伝えている。一度目は、お豆に能力を授ける直前のことであった。

汝思ふ男あらばそれ〳〵の女の魂と入かへ、心の儘にたのしむべし。併わすれても男の魂と取かへることなかれ。此こと背くにおいては、たちまち身に災難あらん。さて又、其方一生の内、両度の難儀あり。わけて二度目の難甚だ大事なり。其時われを念ぜよ。忽すがたをあらはし、さいなんをすくい得さすべし。（巻一第一「色娘の行末は箔の付た豆女」）

虱はお豆に対し、「男の魂と取かへることなかれ」と、異性と魂を取り替えることを禁じている。また、「両度の難儀」に関しては、二度目の危機の時は「われを念ぜよ」と述べている。この「われ」は、虱が清水寺の観音の使いであることを考えると、清水寺の観音を指している。

この「両度の難儀」については、巻二第一から巻三第一にかけて一度目の災難が、巻四第一で二度目の災難が描かれ、どちらの災難においてもお豆は命の危機に陥る。一度目の災難に関しては、怪しい虫だと勘違いされて殺されそうになるものの、お豆自身が行動することもなくその危機を脱する。しかし、二度目の災難では異性と魂を取り替えたことで、経験のない男色を強要され、その苦痛に耐えかねたお豆は観音に祈るという行動をとる。

ア、ラふびんや、おまめはよしないからだをかりそめに、かくまでにくるしみ受、にげんとするも叶はゞこそ、只狩場の雉子の鷹につかまれしよふに、尻からは黄なるなみだをながし、心のうちにくわんねんして、「われ一代の栄花爰につき、和尚が切さきにいのちを落か、なむくわんぜんおんぼさつ」と主馬のもり久同前にかくご極て念てゐる。〈中略〉今一寸も入れると忽命をなくすべきところに、ア、ラ不思儀や、おしやうの床の下よりも、さも大きなるしらみ一疋はい出、一物へしつかりとくいつけば、其いたがゆさたまられず、是はたまらぬと引ぬいてのくを、〈後略〉（巻四第一「色を隠た寺奉公に悟違へた男門の災難」）

この箇所では、お豆は異性と魂を取り替えるという禁を破り罰を受けるが、御告げの通り観音に祈って、虱がその危機を救うという形で観音の霊験が描かれている。

さて、このように二度目の災難と観音の霊験が描かれた後に、お豆の夢の中で、虱の御告げが再度伝えられる。

さて又四ツ谷といふ所に観世音をふかく念ずるむすめあり。しかるに此女、悪人のために難義することあるべし。観世音是を不便に思召れ、われ〳〵にさいなんをすくふべしとの御ことなれば、此役を汝に申付る也。女が難儀をすくいなば、なんぢが行末めでたく災難も有まじ。（巻四第二「色と欲とを一時にいゝつめられた唖の一声」）

「観世音是を不便に思召れ、われ〳〵にさいなんをすくふべしとの御ことなれば、此役を汝に申付る也。」とあるように、虱はお豆

に対し、危機に瀕している女性の救済を依頼している。巻四第二ではこの女性をお豆が色恋を楽しみつつも救う様子が描かれ、「女が難儀をすくいなば、なんじが行末めでたく災難も有まじ」という虱の言葉通り、巻五第二でお豆が武家の夫婦に雇われて栄花に暮らすという結末を迎える。

以上のように、清水寺の観音の御告げはお豆の行動に影響を与えており、『栄花娘』の物語展開の主軸を為していると考えられる。

なお、ここまで検討してきた巻四第一と第二には、『栄花遊二代男』巻四第三「師匠の罰当眼の開中」との酷似性が認められる。『栄花遊二代男』巻四第三では、師匠である豆休先生を侮った二代目豆右衛門が、女性器の中に閉じ込められ、命の危機に陥るが、故郷の産神や豆休先生、阿弥陀如来に祈った後、女性器をふさいでいた男性器に噛みつくことでその危機を自力で脱する。その後、二代目豆右衛門は夢の中で、豆休先生から次のような御告げを受ける。

豆休先生来り給ひ、「なんとまめゑもん、こりたるや。汝此あいだ自慢にほこり、我をさみすだんふとゞき、〈中略〉先生は狐はおかさず、汝は狐にも逢ふたからは先生よりまじと思ふ慢心、是元をわすれ人をあなどる其罪遁れ難し、今日落穴に入、むべうの責をなせしもこらしめの我方便也、此後きつと慎申せ」と夢覚れば〈後略〉（『栄花遊二代男』巻四第三「師匠の罰当眼の開中」）[8]

この御告げの中で、巻四第三で描かれた二代目豆右衛門の危機は、豆休先生を侮るという慢心への罰であったことが述べられている。罰により命の危機に陥るという点、夢の中で御告げを受ける点について、『栄花娘』巻四第一・第二の展開と共通した要素を持っているといえるだろう。

しかし『栄花遊二代男』巻四第三では、祈るという要素こそ存在するが、祈ることと危機を脱することの因果関係が明かされておらず、『栄花娘』巻四第一のような霊験は描かれていない。また御告げについても、二代目豆右衛門の慢心を豆休先生が咎めるだけであり、巻四第三以降の展開に著しい影響を与えることはない。

以上のことから考えると、『栄花娘』巻四第一と第二は、『栄花遊二代男』巻四第三にある二代目豆右衛門の命の危機や御告げの要素を取り入れつつ、更に清水寺の観音信仰という要素を付け加えたものであるといえよう。

以上述べたように、『栄花娘』では清水寺の観音が関係する場面が多く存在する。よって、清水寺の観音信仰は、この作品の根幹にかかわる要素であると思われる。

四　先行する作品における清水寺の観音信仰

それでは、『栄花娘』以前はこの清水寺の観音信仰はどのように描かれてきたのだろうか。本節では御伽草子、仮名草子、略縁起に

おける清水寺の観音信仰について考察する。

まず、御伽草子における清水寺の観音信仰についてだが、新間水緒氏「千手の誓ひぞたのもしき―お伽草子と清水寺観音―」[9]で既に詳細な分析がなされている。新間氏は、物語全体あるいは一部に清水寺が関わる御伽草子の霊験は、①男女の出逢い・幸福な結婚、②失踪者の行方夢告・再会、③出家遁世、④現世利益（立身出世・富貴）、⑤危機救難、⑥申し子、⑦蘇生の七つに区分できるとし、分析の結果として、清水寺が関係する御伽草子では①に関する願意を描いている作品が非常に多いこと、またそれらの作品では女性が主人公である場合が多いことを挙げている。

新間氏の論を踏まえると、御伽草子では清水寺の観音と好色との直接的な関連性は見られないが、清水寺の観音が恋愛に関する願いを叶え女性を救うという要素は既に存在していたということになる。

次に、仮名草子で清水寺の観音信仰が描かれる作品としては、『恨の介』・『薄雪物語』などがある。両作品とも御伽草子と同じく主人公と女性が出会う場として清水寺が設定され、両者の恋愛が成就した理由は清水寺の観音の霊験であるとされている。また、『恨の介』では主人公について、以下の通り説明がなされている。

こゝに、葛の恨の介、夢の浮世の助、松の緑り介、君を思の介、中空恋の介とて、その比都に隠れもなく、色深き男どもあり。なかにも葛の恨の介と申せし人は、一段心細き者なりしが、これももとより観世音の御誓あらたに思ひける事なれば、友とする人も誘はず、たゞ一人清水へ参り、仏の御前にて祈誓申、〈後略〉[10]

この記述を見ると、主人公の恨の介には、信心深いだけでなく、都でも有名な色好みの男性の一人であるという特徴が付与されていることが分かる。御伽草子に存在した恋愛という要素に加え、仮名草子では好色という要素とも関連付けられるようになったのではないだろうか。

次に、略縁起における清水寺の観音信仰を見てみる。清水寺の略縁起には、御伽草子や仮名草子にあった恋愛との関連性は見られない。恋愛に関する利益を宣伝する意識はなかったと考えられる。『洛東　音羽山清水寺略縁起』、『山城国愛宕郡音羽山清水寺縁起』（天保十年頃〈一八三九〉発行か）では、坂上田村麻呂が清水寺を建立した経緯を中心に述べている。また、清水寺の名所の紹介を挙げている略縁起も存在する。

それ以外の特徴としては、平盛久に関する言及が、情報量に違いはあるが、いくつかの略縁起に見られることが挙げられる[11]。このように平盛久に関する言及が清水寺の略縁起に複数見られるのは、近世において認知度が高かった盛久伝承を、清水寺側が宣伝のために利用する意図を持っていたからであろう[12]。

以上のように、清水寺の観音信仰が関係する作品について、各ジャンルで様々な特徴が見られることが分かる。その中でも、御伽草子の恋愛の願いを叶えて女性を幸福な結末に導くという要素は、『栄花娘』も共有しているといえるだろう。『栄花娘』は先行作品に描かれる清水寺の観音信仰や風俗を踏まえているのではないだろうか。

五　清水寺の観音信仰が取り入れられた意味

物語全体を見て行くと、『栄花娘』では、お豆をはじめ、巻四第二の聾唖者の女性、巻五第二に登場する武家屋敷の妻など、色恋に関係する様々な悩みや危機を抱えた女性が登場するが、このような悩みを持つ女性は、観音に対して救いを求めたかどうかを問わず全て救われている。また、女性を困らせたり、危機に陥らせたりする悪人として描かれる男性は、お豆や清水寺の観音によって、明確な形で罰を受けている。この二つの点から、『栄花娘』は物語設定の中心に女性を置き、女人救済を意識した展開がなされていると考えられる。先行作品が好色と滑稽性を描くことに重点を置いているのに対し、これは主人公が女性である『栄花娘』のみに見られる特徴だと考えられる。

先行作品と異なる点があるのはなぜだろうか。性差という点から作品を読むと、巻一第一で好色を疎んだ伯母によって軟禁されたお豆が豆男物を読んだ時に、次のように述べる箇所がある。

扨も〳〵羨しや。我女なり共一念は石にたつやかましい伯母さへしらずばどんなたのしみも出来さうなもの。所せんかふして居ては、生後家も同前。あはれ生をかへて成とも、かの楽しみさへ自由にならばと、〈後略〉（巻一第一「色娘の行末は箔の付た豆女」）

お豆は性別による色恋の制約に不満を述べている。男性と異なり、女性の好色は許されないという意識があることは明らかであろう。この意識がある以上、女性主体の色恋を描くためには、女性の色恋を正当化できる要素が必要だったと考えられる。

『栄花娘』の場合、女性の色恋の悩みや色恋による命の危機を、清水寺の観音や使いである虱、あるいは申し子であるお豆が救うという物語を描くことで女人救済という要素を取り入れ、女性の色恋を正当化したのではないだろうか。お豆をはじめとした女性たちを、清水寺の観音が守護し、救済するという教訓的な意味づけがなされることで、女性が主体であっても、先行作品と同様、自由な色恋を描くことが可能となった。巻一第一で、清水寺の観音が色恋の自由を願うお豆に対して不憫に思う描写があったこと、また巻四第一において、お豆が清水寺の観音との約束を破ったことによる罰と、観音を祈ることによる救済が描かれたことに関しても、観音の霊験のあらたかさを強調するため必要であった展開であるといえるだろう。

おわりに

『栄花娘』は好色要素が強い作品ではあるが、その根底には清水寺の観音信仰という要素が存在する。それは、無条件に色恋を楽しむことを許されない女性の色恋を意味があるものとして正当化するために必要な教訓であった。先に挙げた尾崎氏・花咲氏の論では、この要素について検討がなされていないため、『栄花娘』の正当な評価が行われているとはいえないだろう。

信仰対象に清水寺の観音が選ばれた理由としては、先行作品において清水寺の観音が女性や色恋と関連付けられていたことがある。また、『清水寺史』[13]で述べてあるように、近世当時の清水寺門前に私娼が多くいたことも影響を与えているのではないだろうか。

さて、本稿では観音信仰に着目して『栄花娘』の考察を行ったが、それ以外にも本作品は滑稽性をはじめとした他の要素を有している。それらが作品に取り入れられた意味についても考察する必要があるだろう。その上で、豆男物に女性が取り入れられたことによる効果が何であったのかを、他の豆男物をも対象に加えつつ検討していきたい。

【注】

(1)『栄花娘』の諸本は、国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」(http://base1.nii.ac.jp/-tkoten/)によれば、東京大学附属図書館霞亭文庫(全巻)、国文学研究資料館(全巻)、天理大学附属天理図書館(全巻)、蓬左文庫(巻三のみ)に伝存が確認されている。本稿における本文引用は、天理大学附属天理図書館蔵本の本文に拠った。なお、花咲一男『風流江戸のふきよせ』(一九八二年、三樹書房)所収本文を参照した。

『栄花娘』(天理大学附属天理図書館蔵本(請求番号九一三・六二/イ三六七)の書誌は、次の通りである。

書型、中本、五巻五冊。刊本。表紙、巻一のみ後補表紙。青色。巻二～五は縹色。縦一八・五センチ×横一三・二センチ。外題、第一巻欠、それ以外は表紙左肩に題簽「潤色栄花娘二(～五)」。内題、「潤色栄花娘巻之一(～五)」。丁数、巻一、一五丁、巻二、一一丁、巻三、一六丁、巻四、一八丁、巻五、一九丁。匡郭、単枠、縦一五・三センチ×横一〇・九センチ。序、巻一にあり。末に「誹者/漁柳誌/寅のむつまし月のはじめ」との記載あり。跋、なし。末尾に『潤色栄花二代娘』出版予告あり。

(2) 飯倉義之編『怪異の時空2　怪異を魅せる』(二〇一六年一二月、青弓社)所収、六六ページ。

(3) 尾崎久弥「豆女の小説」(『江戸小説研究』〈一九三五年、弘道閣〉所収)。

(4) 前掲『風流江戸のふきよせ』。

(5) 以下、『女男色遊』の引用は、八文字屋本研究会編『八文字屋全集』第五巻(一九九四年、汲古書院)の本文に拠る。

なお、句読点は私に改めた。他の文献の引用についても同様である。

(6) 野間光辰編『新修京都叢書』第一巻(一九六七年、臨川書店)、一九ページ。

(7) 中野猛編『略縁起集成』第四巻(一九九八年、勉誠社)、一七七～一七八ページ。なお、割注は漢文の場合書き下し、《》の中に入れた。また、割注の改行箇所は示さない。

(8) 花咲一男校訂『栄花遊二代男』(一九八二年、太平書屋)、一一五ページ。

(9)『花園大学日本文学論究』四号、二〇一一年一一月。

(10) 前田金五郎他校注『日本古典文学大系　仮名草子集』（一九六五年、岩波書店）五一ページ。

(11) 以下、一例を挙げる。

平家の侍盛久は、平家滅亡の後鎌倉殿より生捕せ給ひて、関東へぞ下り侍る。既誅せらるゝに定る。明日と云、夜もすがら普門品など読てまどろむ所に、夢現共なく老僧来て、盛久に向て宣く、我名を唱るによって来れり。安く急難を退べし。敢て驚事なかれ、但神呪を授給ふと覚て夢覚ぬ。翌日盛久獄屋より引出され既死門に趣き、太刀取頭を打に、太刀三段に折ぬ。〈後略〉（『洛東　音羽山清水寺略縁起』）

(12) 略縁起と同様に、第三節に引用した通り、『栄花娘』でも平盛久について言及が見られる箇所が存在する。

(13) 清水寺史編纂委員会『清水寺史』（音羽山清水寺、一九九五年）第三章第二節、河内将芳「門前町の賑わい」二六〇ページ。

〔付記〕

本稿は、平成二八年度広島大学国語国文学会研究集会（平成二八年七月九日）での口頭発表を基にしています。席上貴重なご意見を賜った諸先生方に心より御礼申し上げます。

また、『栄花娘』の複写をお許し下さった天理大学附属天理図書館に対し、御礼申し上げます。

―ふくおか・いすず、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学―